

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 4 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K12991

研究課題名（和文）西洋哲学における「崇高」概念の変遷：古代から現代までの総合的調査

研究課題名（英文）The Development of the Sublime in Western Philosophy: A Comprehensive Survey from Ancient to the Present

研究代表者

星野 太 (Hoshino, Futoshi)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：80646208

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題の目的は、西洋哲学における「崇高」という概念をひとつの軸に、古代から現代までの美学史を通覧する視座を獲得することにあった。古代ギリシアの修辞家ロンギノスによる『崇高論』から、近代におけるバークやカント、さらには現代におけるリオタールやド・マンにいたるまで、そこでは超越的、空間的、感覚的・統一的な垂直方向の「崇高」概念と、それに拮抗する水平的・時間的・修辞的・散文的な水平方向の「崇高」概念が存在する。本研究課題を遂行した4年間を通じて、この概念のもつ歴史のかつ理論的な見通しを得ることができたことが、最大の成果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題は、おもに英語、仏語、独語圏における文献を対象に、西洋哲学における「崇高」の概念の通史的かつ包括的な理解をめざすものであった。これまで、日本語でも美学や隣接領域における「崇高」の研究書や論文は数多く存在したが、本課題はあくまでもその時代的な変遷や地域的な差異に着目し、いわばその生成史をたどる試みである点で、従来のものとは大きく異なっている。その成果は学術書や論文のかたちにとどまらず、一般書や商業誌における総説というかたちでも公にされた。そのような意味で、本研究成果は学術的・社会的に、それぞれ一定の意義をみとめられると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This research project aimed to gain a perspective on the history of aesthetics from the ancient to the present, with the concept of the sublime in Western philosophy as one axis. From On the Sublime by the ancient Greek rhetorician Longinus to Burke and Kant in the 18th and to Lyotard and de Man in the 20th century, there exists a vertical concept of "the sublime," which is transcendental, spatial, sensual, and unified, and a horizontal concept of "the sublime," which is liminal, temporal, rhetorical, and prosaic. The "sublime" exists in two directions. The most outstanding achievement of this project is that we have gained a historical and theoretical perspective of this concept through the four years of carrying out this research project.

研究分野：美学

キーワード：崇高 美学 修辞学 ロンギノス バーク カント リオタール ド・マン

## 1. 研究開始当初の背景

### A 本研究に関連する国内・国外の研究動向

近代哲学における「崇高」(英・仏: sublime, 独: erhaben) をめぐる議論は、バークの『崇高と美の観念の起源』(1757) およびカントの『判断力批判』(1790) という二つのテキストによって代表されてきた。歴史的に見ても、この「崇高」が美学における主要概念のひとつとして浮上したのは18世紀後半のことであり、バーク、カント、さらにそれに続くドイツ・ロマン主義における「崇高」については、国内外のいずれにおいても少なからぬ研究の蓄積がある。これら近代における「崇高」は、しばしば「恐怖」や「抽象」と結びつけられ、さらにはカントが定式化したような超感性的なもの(=理性理念)の「否定的表出」としての性格が強調されてきた。このような「崇高」のロマン主義的な側面に重点を置いた代表的な研究としては、トマス・ワイスケル、ポール・クラウザー、牧野英二らの著作を挙げることができる [Thomas Weiskel, *The Romantic Sublime* (1976), Paul Crowther, *The Kantian Sublime* (1989), 牧野英二『崇高の哲学』(2007)]。

これに対し、それまで支配的であった「崇高」のロマン主義的な理解から逃れ、同概念を文学・修辞学・倫理学・政治学といった多領域にまたがる問題として捉え直そうとする研究もまた存在する。これらは偽ロンギノスの『崇高論』(紀元1世紀と推定)や、ニコラ・ボワローの『崇高論』翻訳・注解(1674)といった古典的な文献の読み直しに始まり、シラーやヘーゲルといったカント以後の「崇高」の伝統のなかに、むしろ非ロマン主義的な側面を見いだそうとするものである。こうした動向に連なる国内外の研究としては、ニール・ハーツ、ポール・ド・マン、宮崎裕助らの著作を挙げることができる [Niel Hertz, *The End of the Line: Essays on Psychoanalysis and the Sublime* (1985), Paul De Man, *Aesthetic Ideology* (1996), 宮崎裕助『判断と崇高』(2009)]。

### B 以上の先行研究に対する本研究の位置づけ

これまで、申請者は前述の二つのうちの後者の動向、すなわち崇高の領域横断的な研究を進めてきた(代表的なものとしては、後述する博士論文「修辞学的崇高の系譜学——ロンギノスから現代まで」[2014]など)。申請者の研究の特色は、哲学のみならず、文学や修辞学といった隣接分野にも視野を広げつつ、古代以来の「崇高」概念の形成を思想史的に明らかにする点にある。このような研究は、ジャンニ・カルキアやバルディーヌ・サン・ジロンらによって部分的に着手されてはいたものの、世界的に見てもこれに類する研究はほとんど存在しなかった [Gianni Carchia, *Retorica del sublime* (1990), Baldine Saint Girons, *Le sublime de l'Antiquité à nos jours* (2005)]。本研究は、以上のような申請者自身のこれまでの研究を継承しつつ、従来もっぱら近代哲学の枠内で論じられるにとどまっていた「崇高」概念を、より広く西洋の思想史のなかに位置づけることを目的とするものである。

## 2. 研究の目的

以上で示してきたように、詩学・修辞学・美学といった複数の領域を同時に視野に収めつつ、哲学的な概念としての「崇高」の変遷を明らかにすることを試みた研究は、世界的に見てもごくわずかであった。この「崇高」という概念そのものは、これまでにもさまざまな分野で検討にか

けられてきたものの、それを理論的かつ歴史的に統合する視座が、これまでの研究史には欠けていたと言えよう。その意味で、本研究はロンギノス、バーク、カントといった個々の哲学者の議論に注目しつつも、最終的にはそれをより広い歴史的・理論的な枠組みのもとで扱おうとするものである。

今回「若手研究」に申請した本課題は申請者個人による研究として構想されたものであるが、今後これを足がかりに、哲学以外の分野の研究者との共同研究を発足することも計画している。「崇高」という用語は、人間の情動に広く関わるものである以上、認知科学や文化人類学なども深い関わりを有するものである。そのための基礎作業として、古代から現代までの哲学における「崇高」の概念的系譜を辿り、それをより広く他分野に開いていくという結果こそが、長期的に本研究が目指すところであり、その最大の意義でもある。

### 3. 研究の方法

本研究が対象とするのは、西洋の思想史における「崇高」をめぐる言説すべてにわたっており、それが包含する範囲は当然のことながら膨大なものにならざるをえない。そこで、本研究ではその期間内（2019～2022年度 [4年間]）における達成目標を、主に次の三点に定める。

#### A 古代ギリシア・ローマにおける「崇高」概念の内実を明らかにすること。

申請者はこれまで偽ロンギノスの『崇高論』に関する研究を継続的に行なってきたが、本研究課題においては、ホメロスなどの古典文学、さらにはデメトリオス、キケロ、クインティリアヌスらの修辞学書の読解を通じて、古代ギリシア・ローマにおける「崇高 (hypsos, sublimis)」の用例を具体的に明らかにする。

#### B 中世・初期近代におけるキリスト教世界の「崇高」概念の用例を調査すること。

今日の「崇高」研究における欠落のひとつは、17世紀以前のラテン語による著作物において、「崇高」(sublimisあるいはsublimen)がいかに規定されていたのかが詳らかになっていないことである。この領域に関してはとりわけ先行研究が少なく、研究にあたっては一定の困難が予想されるが、ダンテやペトルルカをはじめとする複数のカノン（および、クルティウスやアウエルバッハといった文献学者によるその読解）に即して、その足がかりを得ることを目標とする。

#### C 近代・現代における「崇高」の理論的展開を歴史的かつ地域横断的に跡づけること。

前述のように、近代における「崇高」の哲学的な規定は、バークおよびカントのそれを嚆矢とする。しかし本研究はそれらを踏まえたうえで、19世紀から今日までのヨーロッパおよびアメリカ合衆国における「崇高」の理論的展開を、同時代の哲学や批評理論との関わりを踏まえつつ考察する。そこで主な参照項となるのは、ポール・ド・マンを中心とするイェール学派の理論家、およびジャック・デリダを中心とする戦後フランスの哲学・思想である。

### 4. 研究成果

#### 著書

- ・星野太『美学のプラクティス』水声社、2021年、全232頁。
- ・星野太『崇高のリミナリティ』フィルムアート社、2022年、全300頁。

- ・星野太『食客論』講談社、2023年、全272頁。

## 論文

- ・星野太「感性的対象としての数：カント、宮島達男、池田亮司」『現代思想』47巻15号（2019年12月号）、188-196頁（査読なし）。
- ・星野太「ポストモダンの幼年期：あるいは瞬間を救うこと」『現代思想』49巻7号（2021年6月号）、22-31頁（査読なし）。

## 学会発表

- ・Futoshi Hoshino, “On the Sublime, or the Terror of Philosophy,” The Glass Bead Game: Views from The Anti-World, Okayama Art Summit 2019, September 27-29, 2019.（招待講演）。
- ・星野太「概念のアトリエ：ジャン＝フランソワ・リオタールの講義録から見るフランス現代思想」第39回新潟哲学思想セミナー(NiiPhiS)、2020年12月24日（招待講演）。
- ・星野太「真実の終わり？：ポスト・トゥルースの時代におけるフランス現代思想」早稲田大学先端社会科学研究所ランチセミナー、2021年2月3日（招待講演）。
- ・Futoshi Hoshino, “Secret and Translation: Revisiting Tosaka Jun's Philosophy of Technology,” 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies (EAJ), August 27, 2021.
- ・星野太「食の規範性をめぐって：ブリア＝サヴァラン『味覚の生理学』とふたつの逃走線」表象文化論学会第16回大会、2022年7月2日（招待講演）。

## 訳書

- ・ジャン＝フランソワ・リオタール『崇高の分析論：カント『判断力批判』についての講義録』星野太訳、法政大学出版局、2020年、全361頁。
- ・カトリーヌ・マラブー『真ん中の部屋：ヘーゲルから脳科学まで』西山雄二・星野太・吉松覚訳、月曜社、2021年、全371頁。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 星野太	4. 巻 49
2. 論文標題 ポストモダンの幼年期：あるいは瞬間を救うこと	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 22-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 星野太	4. 巻 47
2. 論文標題 感性的対象としての数：カント、宮島達男、池田亮司	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 188-196
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 3件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Futoshi Hoshino
2. 発表標題 Secret and Translation: Revisiting Tosaka Jun's Philosophy of Technology
3. 学会等名 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies (EAJS) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 星野太
2. 発表標題 概念のアトリエ：ジャン＝フランソワ・リオターの講義録から見るフランス現代思想
3. 学会等名 第39回新潟哲学思想セミナー (NiiPhiS) (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 星野太
2. 発表標題 真実の終わり? : ポスト・トゥルースの時代におけるフランス現代思想
3. 学会等名 早稲田大学先端社会科学研究所ランチセミナー (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Futoshi Hoshino
2. 発表標題 On the Sublime, or the Terror of Philosophy
3. 学会等名 The Glass Bead Game: Views from The Anti-World (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 星野太	4. 発行年 2021年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 235
3. 書名 美学のプラクティス	

1. 著者名 ジャン＝フランソワ・リオタール	4. 発行年 2020年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 361
3. 書名 崇高の分析論：カント『判断力批判』についての講義録	

1. 著者名 カトリーヌ・マラー	4. 発行年 2021年
2. 出版社 月曜社	5. 総ページ数 371
3. 書名 真ん中の部屋：ヘーゲルから脳科学まで	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------